

2020年4月17日

「学科長からのメッセージ」

文化表現学部 国際英語学科 学科長 上村幸弘

国際英語学科の皆さん。こんにちは。学科長の上村です。本日は2020年4月15日水曜日。大阪府下に緊急事態宣言が発出されて1週間以上がたちました。その間、大学の出入りは禁止され、皆さんにとっては学びの機会が、そして私たちにとっては教育研究の機会が奪われています。連日メディアでは、Stay homeとかStay at homeという言葉が伝えられています。「自粛なさい」「家にいなさい」というわけです。

本日はそのことについて少しお話ししたいと思います。ヨーロッパでは中世後期大きな感染が広まります。ペストです。1348年、14世紀半ばにから始まったペストの拡大は、1420年まで収束することがありませんでした。その間、ヨーロッパの人々は自粛し、多くの人々の命が奪われました。ペストの生命力は強く、16世紀、17世紀と生き続けていきます。小さな流行が繰り返されたのです。

皆さんはシェイクスピアという人をご存知でしょうか。『ロミオとジュリエット』や『ベニスの商人』を書いた、イギリスを代表するルネッサンスの劇作家です。彼の代表作群に四大悲劇という作品群があります。1600年の『ハムレット』に始まり、『オセロ』『リア王』そして『マクベス』へと続いていきますが、1作目の『ハムレット』が書かれてから、2作目の『オセロ』が描かれるまでの間に4年間のブランクがあります。そうです、この間にペストが発生したのです。ロンドンでは劇場が封鎖され、多くの人が職を失い、家族を失いました。シェイクスピアもロンドンの自宅で、いえ、ロンドンの下宿で、彼は下宿生活を送っていました。今の私たちと同じように自粛生活を送っていたに違いありません。Stay homeというわけです。しかし彼はその家の中で何もしなかったのでしょうか？ けっしてそうではないと思います。彼は家の中で次の作品に向けて構想を練り、そして執筆活動を続けていたと思います。それが『オセロ』です。

今こうしている瞬間にも、世界中の若い芸術家たちが、ポスト・コロナに向けて、大きな仕事に取り組んでいることと思います。そして、事態が収束した暁には、100年後、200年後に残る素晴らしい作品を私たちはきっと目にすると思うと思います。確信しています。なぜか？ 歴史は繰り返すからです。

若き芸術家。それは皆さんのことです。この時間、この瞬間をポジティブに捉えましょう。お会いできる日を楽しみにしています。